多摩川（東京都、神奈川）

私は、東京都の調布市に住んでいる。調布市は、神奈川県と東京都の中間付近に位置しており、この二つの都道府県を隔てるように多摩川が流れている。

多摩川は、たまちゃん出現等で、マスコミに取り上げられることの多い有名な川である。

今日、この多摩川はとても美しい状態を保っている。アメンボや鴨や鯉を、始めとした様々な生物（抽象的ですみません。名前のわからない生き物が多くて・・・）の棲み家になっている。年が明けて、川に散歩しに行くと、多くの人が、川を眺めに、川遊びをしに、絵を描きに、写真を取りに、釣りをしに、さまざまな目的で多摩川に集う様子が伺えた。

ただ、残念なことに、川の流れの緩やかな場所や淀んでいる所では、行きかう人々に見合う量のゴミが大量に見られた。釣り道具のゴミなのか、ワイヤーや針やバケツなどが落ちており、コンビニの袋やペットボトルは当然のように放置されていた。

私が、調布市に住み始めたのが小学校１年生のときであるから、多摩川とのつきあいは、今年で１３年目になる。

地元の小学校に通うわけだから、理科の授業ではよく多摩川が利用されたし、国語の授業でも感性を伸ばす為とか何とかで、引率の先生と何度か足を運んでいる。しかし、何を調査したのかは忘却の彼方で、思い出せるのは、先生の話を碌に聞きもせず友人と魚取りに励んでいたことである。

大学３年生、受験期真っ盛りの夏、いい加減勉強が嫌になって美大に行くと決めた私は提出の題材に多摩川を選んだ。本当の意味で多摩川に向き合ったのは、これが初めてだったかもしれない。毎日、早朝に（作品を人に見られるのが恥ずかしかったので）、多摩川を観察し描くため通い続けた。

予定では、朝焼けの空が、半透明の多摩川に射し込み、鮮やかな色が光の屈折や水による反射などで織り成される、それこそ完璧な作品が作られるはずであった。この夢見た作

品が完成していたのであれば、私はこの席に今座っていないのであろう。
　川に朝日が射し仕込まれることは、決してなかった。
　多摩川は透明ではなかったのだ。
何故かは分からない。そこに住む生物が多いからか、または人間が汚してしまったのか、早朝という時間帯が悪かったのか、単純に私が色盲だったのか。
　それに気が付き、絵を描くことを断念したのが８月下旬、大学受験に悪戦苦闘したのは言うまでもない。そして、受験戦争に勤む私は、それきり多摩川に関心を示すことがなくなった。

　近所の人に２０－３０年前の多摩川の様子を聞いてみたが、皆一応にして、反応が薄く、適当なことを言っていた。因みに、取材に応じてくれたのは、隣人の丸山夫人（78）と丸山長女（48)、犬の散歩仲間である池野夫人（57）と田中夫妻（50 代）だ。
　昔はもっとキレイだったと、一方が言えば、今のほうがキレイだと言い出すし、昔から変わらないんじゃないのとタバコを片手に言う人もいる。時期を具体的に聞こうとすると、顔を顰められた。井戸端会議に、真面目な話は持ち込み禁止のようで、すぐに別の話題に変えられてしまった。
　私と同様、人々は、どこまでも川に無関心だった。

　今日、多摩川について、多くの Web-site がある。そのうちの 3 つのサイトを以下に、まとめた。

　国土交通省関東地方整備局、京浜河川事務所の Web-sit
　ここでは多摩川・鶴見川・相模川についての情報を提供している。リアルタイムで多摩川の映像が見ることができ、洪水などの防水情報、入札契約情報、工事情報や水質情報も得ることができる。また、川の中やその近辺に生息している生物の紹介、観光スポットやイベント情報も掲載されている。

　多摩川流域リバーミュージアムの Web-sit
　この「多摩川流域リバーミュージアム（ＴＲＭ)」は、多摩川流域を大きな博物館ととらえ、誰もが多摩川の持つ価値を共有、学習できるようにしようという試みの元、作られたサイトである。市民団体や学校などが行う河川観察会、自然学習や文化芸術活動などにおいて、講師の派遣や活動プログラムの提供などの支援をしている。「岸辺の散策路」「川の一里塚」「水辺の楽校」などの、河川ふれあい施設や市民と協働で運営する市民活動拠点の整備を行い地域社会に貢献し、自然、歴史、文化、防災などの情報を川原にいながらにして、携帯電話やパソコンなどによって、提供収集するのだ。

多摩川源流研究所の Web-sit

源流研究所は、源流部の調査と研究、会報「源流の四季」を中心とする情報の発信、未来を拓くたくましい子供たちを育てるための「源流体験教室」の創設と実施、「源流・水源の森体験の旅」交流事業の推進、各地の源流域との交流と情報交換などの、活動に取り組んでいる研究所のサイトである。源流研究所の諸事業は、流域の市民からの共感と協力を得て、こうした活動を通して、多摩川源流域への新しい関心と注目を集めることを目的としている。

今も、多摩川には、絶え間なく、滞りなく水が流れている。しかしながら、この川を構成する水は常に異なる水なのだ。だから、川は愛情を持って接していれば、きれいになるはずである。

去年は、川の水質事故が相次いだ。鯉ヘルペスを始めとし、濁水、着色水、油浮遊、多摩川水系では、30 件発生した。

水質改善に勤しむ業者は少なくないし、近年、環境問題の提起と共に増加傾向にある。中国から垂れ流される、工場廃棄物に憤りを感じる人も、鯉ヘルペスの出現によって水質に疑問を抱く人も増えた。また、たくさんの地域で、川に関する認識や関心を高める取り組みが行われている。その一方で、川にゴミを捨て、飄々と多摩川の土手を散歩する人もいる。

川は、人の生活に密接に関係するものである。さまざまな生命育みながら、時に牙を剥くこともある。人々の生活を脅かすこともある。それが天災ならば、仕様がない。しかし、人間の中華思想の反映としての、人災であれば、許される道理がない。

歴史を見てもわかるように、人は川の近くに集い、文明を作ってきた。世界四大文明は別名、四大河文明である。余剰農産物の蓄積で職業分担がされ、効率化が進み、余暇が増え、生活は安定した。国の興亡が繰り返され、発展してきた。

川は常に私たちの側にいたのだ。川離れが進む、今、すべての人がもう一度、川との関係を顧みる必要がある。人々が集う川のあり方が本来の姿なのだ。

参考資料

国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所
http://www.keihin.ktr.mlit.go.jp/index_top.html
多摩川リバーミュージアム
http://www.tamariver.net/01trm/river_museum/index.htm
多摩川源流研究所
http://www.tamagawagenryu.net/topmain.html